

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

3

Minazuki Shizuru
水無月静琉

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

フイト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェニル。
小型にもなれる。

ベクトル

火神からタクミのもとに
送られたスカーレット
キングレオ。

アレン

水神の子で、タクミに
保護された少年。
格闘術が得意。

シルフィール

タクミを異世界に転生
させた風の神様。

エレナ

水神の子で、兄・アレンと
ともにタクミに保護された少女。
格闘術が得意。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として
転じた本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

**登場
CHARACTER
人物**

第一章 海で遊ぼう。

僕、茅野巧（かやのたくみ）は不慮の事故で死んでしまった元日本人だ。

その事故は、地球とは別の——エーテルディアという世界の神様の一人、風神シルフィールが空間の歪み（ゆがみ）を直そうとして、うっかり力加減を間違えてしまったことで起きたらしい。

事故の結果、僕の魂は傷つき、地球で生まれ変わることができなくなった。

だから、僕はシルフィール——シルの力でエーテルディアに転生することになったんだ。何故（なぜ）か、シルの眷属（けんぞく）ということになっていただけ。

転生して間もなく、僕は双子と思われるアレンとエレナに出会った。

実はこの二人は、水神ウインデルの子供だ。

出会った当初は神様の子供だなんて思ってもみなかったが、明らかにやせ細っていた子供達を放つておくことができず、面倒を見ることにした。まあ、そうしているうちに出自が判明したんだけどね。今じゃあ、アレンもエレナも弟妹のように可愛がっている。

そんな二人を連れて、冒険者として生計を立てながらのんびり（？）と生活している僕だが、今はガディア国の南端、ベイリーという港街にいる。

ベイリーの街に到着した翌日、僕達は人気のない海岸に来ていた。

海に着いた直後、すぐに人魚であるミレーナさんと出会い、人魚族の里へ赴いたので、まだ浜辺を堪能していなかった。

それを思い出し、アレンとエレナを連れて遊びに行こうと考えたのだ。

「うきやー」

『わふ〜』

『がう〜』

海に到着するなり、アレンとエレナは呼び出した僕の契約獣——フェンリルのジュールと飛天虎のフィートとともに海へと突っ込んでいった。

「それー」

『わふっ』

『がう』

みんなはしゃいで、浅瀬で海水の掛け合いを始めた。アレンとエレナは両手で水をすくって、ジュールとフィートは鼻先で水を飛ばしている。

お互いに水を浴びて、楽しそうに歓声を上げていた。

今日は人魚の腕輪を身につけていない。人魚の腕輪は本来、海中でも呼吸を可能にする魔道具だが、身につけていれば濡れないという利点もあった。

今日は腕輪なしだから、アレンとエレナは服を着たまま全身びしょ濡れになっているが、まあ、たまにはこういうのもいいだろう。

「ボルトは遊ばないのか？」

『ピィ、ピィ』

「遠慮する」とでも言っているのだろう。サンダーホークのボルトは、大人しく僕の肩に止まっている。

僕はボルトをひと撫ですると、砂浜に座って子供達が遊んでいる姿を眺めることにした。

『わふっ』

『がう』

「ひゃー」

あつ、ジュールとフィートがアレンとエレナに飛び掛かり、バシャーンと軽快な音を立てて、みんな揃って海にダイブした。

あーあ。まあ、ジュールもフィートも全力で体当たりしたわけじゃないから、怪我はしていないだろう。

——ブルブルブルブルッ。

「うにゃー!!」

アレンとエレナが起き上がったところで、ジュールとフィートが身体を震わせて毛に含んだ水分を勢いよく振り飛ばした。

あれって意外と水がたくさん飛んでくるんだよねえ……。

水を飛ばし終わったジュールとフィートは、一目散に逃げ出した。

「じゅーる!!」

「ふいと!!」

そんなジュールとフィートを、アレンとエレナが追いかける。

ジュールもフィートも本気で逃げているわけではないので、アレンとエレナはすぐに追いつき、二匹の背に飛び乗るように抱きついた。

「つかまえたー!」

まあ、普段はベットみたいな獣達だが、間違いなくSランクの魔物だ。

彼らが本気で走ったら、さすがに規格外の力を持つアレンとエレナといえども簡単に追いつくことはできない。

「きゃー!」

『わふっ』

『がう』

今度はアレンとエレナが逃げるように走り出し、それをジュールとフィートが追いかける。あれは鬼ごっこをしている感じだな。

「あ、かにー!」

交互に鬼役をしながら走り回っている二人と二匹の進行方向に、サンドクラブが現れた。

『わふっ』

逃げる番であったジュールが真っ先に向かい、足払いでサンドクラブを吹っ飛ばした。ペシツ、と軽く前足を振った程度だ。

だが、それだけでサンドクラブは弾き飛ばされ、海面から突き出た岩に当たって動かなくなった。今のは酷い……。道を歩いていて、小石があったから蹴っ飛ばした、みたいな感じだった。相手は魔物だが、戦闘でも何でもない倒され方は何だか不憫ふびんだな。

『ビィィ』

すかさずボルトが、砂浜に打ち上がったサンドクラブを足で掴つかんで僕のところに運んでくる。戦利品の確保をして、ジュールもボルトもご満悦のようだ。

せめてこのサンドクラブは、後で美味しくいただくことにしよう。

——バシヤツ。

「うわっ!!」

な、何だっ!?

陽気がポカポカと暖かく、少しうとうととしていたようだ。

そこに大量の水が僕を目掛けて飛んできたらしい……。全身びしょ濡れだ。

「スススス〜」

『わふ〜』

『がう〜』

してやったり、そんな顔をしている子供達が見えた。

海辺で嬉しそうにしている姿からすると、子供達が僕に水を掛けたのだろう。

『ピィィ』

ボルトは僕を心配するように鳴いたが、自分はちゃっかり避難していた。そんなにきちんと避難できる時間があったのなら、僕に教えて欲しかった……。

「こら、お前達！」

「「うきゃ〜」

『わふ〜』

『がう〜』

僕は怒ったふりをしながら立ち上がり、海に入ってしまった。

すると、二人と二匹は沖の方へ泳いで逃げる。あのはしゃぎっぷりなら、僕が本当に怒っているとは思っていないだろう。

僕は水深が膝丈ひざたけくらいになったところで立ち止まると、魔力を練って水魔法で海水を操り、沖の方に大きな波を作る。そして、その波を子供達の方へと向かわせた。

あれだ。プール施設とかによくある、波の出るプール。あんな感じにしてみた。

海面に浮いた子供達の体を、波で浜辺の方へと押し流す。

「「きゃはは〜」

アレンとエレナは波に流されながら軽快に笑っていた。どうやら面白いらしい。

「おにーちやーん♪」

「もういっかい♪」

浅瀬へと運ばれたアレンとエレナはまた沖の方へ泳いでいき、もう一度やってくれとリクエストしてきた。

「ほら、行くよー」

「「はーい」

僕は再び、魔法で波を作ってアレンとエレナを押し流す。

「「きゃはは〜」

また、アレンとエレナの笑い声が響いた。

二人はこの遊びをとても気に入ったようで、その後も「もう一回」「もう一回」と何度も頼まれた。僕はリクエストに応え、水魔法を繰り返し使う。

大量の水を操るので、これは意外と水魔法の良い訓練になりそうだ。熟練度を上げるために少し頑張っておこう。

——ピロンッ♪

「あっ」

何だかんだ子供達のリクエストに応じて十数回と繰り返したところで、頭の中に電子音が聞こ

えた。

これは、火神サラマンティール様が送ってくれた契約獣が到着したのかな？
火神様は、僕がエーテルディアで料理を発展させたことを喜び、そのお礼としていろいろなアイテムをくださった。その上、【火魔法】のスキルを付与してくれて、契約獣も送ってくれることになっていたので。

電子音が聞こえた直後、視界に大きな獣が現れた。

それは、のしのしと僕に近づいてくる。

「はあ!？」

……まさか……なあ？

僕の視界に映ったのは、真つ赤な毛並みの大きなライオンだった。

ゾウ並みの大きさか？ ああでも、ゾウの姿を間近で見ただけではないので、はっきりとはわからない。だが、おそらくそのくらいの大かさだろう。

僕はライオンの正体を確かめるべく、心の中で【鑑定】と念じた。

ステータス

【名前】――

【種族】スカーレットキングレオ〔タクミの契約獣〕

【年齢】7

【レベル】33

【スキル】火魔法 爪斬撃 咆吼ほうごう 突撃つうげき 噛み砕きかみくだき

縮小化 暗視 気配感知

うわあ……。とんでもない獣がやって来た。

種族の項目には、僕の契約獣とある。やはり火神様が送ってくれると言っていた契約獣で間違いない。

スカーレットキングレオはSランクの魔物で、『人喰い獅子』だの『血塗れ獅子』『赤い悪魔』などと呼ばれるほど、凶暴で獰猛どうもうなことが知られている。

戦力としては申し分ないが……これ、絶対に連れて歩けないよな？

どう考えたって恐怖の対象じゃないか？

「君は火神様から送られてきたんだよね？」

『ガルルッ』

うん、体が大きいから少し鳴いただけで凄い迫力がある。

「あー、僕はタクミ。よろしくね。えっと、そうだな……ベクトル。君の名前はベクトルにしようか」

『ガルツ』

喜んでいいのか？ 迫力はあるが、意外と人懐っこいみたいだ。

しかし、やはりデカイな……。ジュールやフィートと同じように【縮小化】のスキルを持っているから、小さくなくてもらうか？

「あー、悪いけどベクトル、小さくなってくれるかな？ そのままじゃあ顔がよく見えないうし、話しづらいんだ」

『ガルツ』

僕がそう言くと、ベクトルがほんのり光って大型犬くらいの大きさになった。

あ〜……。

ベクトルの見た目はとても特徴的で、大型犬サイズになっても、姿は赤いライオンのままだ。

……これ、小さくてもスカーレットキングレオだと一発でわかるんじゃないか？

ジュールやフィートのように、仔犬や仔猫と言って誤魔化すことはできないと頭に入れておかないとな。

「べ〜くろー？」

『がる』

いつの間にか、アレンとエレナがベクトルに近づいていた。子供達だけでなく、先輩契約獣達も集まっている。

「アレン、エレナ。ベクトルも今日からうちの子だ。仲良くするんだよー」

「うんー！」

「ジュール、フィート、ボルトも。新しい仲間だよ。仲良くなー」

『わふっ』

『がう』

『びい』

見た目がどうであれ、とりあえずベクトルにも従魔であることを示す首輪を用意しないとな。ジュール達とお揃いでいいかな？

僕は海から上がるとまず、生活魔法の《ウオッシング》と《ドライ》を駆使し、体を綺麗にしてびしょ濡れになった服を乾かした。

そのあと、ベクトル用の魔道具を《無限収納》から取り出す。ジュールとフィートとお揃いの状態異常耐性の効果が付与された黒い革製の首輪と、物理攻撃上昇の効果が付与された金細工の腕輪だ。

首輪には魔石がついているんだが、ジュールとフィートは瞳の色と魔石の色を同じにしたんだっとな。ベクトルの瞳は……琥珀色か？

残念ながら同じ色の魔石がついた首輪はなかったので、一番似ている黄色い魔石がついたものにして、ベクトルに身につけさせた。

「いくよー。それー」

『わふっ』

「こっちもー。それー」

『がう』

ベクトルはすっかりみんなと馴染んで、砂浜で遊びを開始していた。

今はアレンとエレナが木でできたボールを投げ、それを契約獣達が取りに走っている。

ジュール、フィートと順番が回り、次はベクトルの番だ。

「ベくとるもー」

「いくよー」

『がる〜』

アレンが声を掛け、エレナがボールを投げる。だが――

「あれー?」

「お、おい? ベクトル、どこに行くんだー?」

ベクトルは、アレンとエレナが投げたボールを通り越し、勢いよく駆けていってしまった。そして、あつという間に視界からいなくなる。

追いかけたほうがいいんだろうか……? と思っていたら、ベクトルはすぐに戻ってきた。

「……?」

ん? ベクトルは何かを唾くえて……んなっ!?

「うわっ! ベクトル。お前、何を持ってきたんだっ!?!」

ベクトルが連れてきたのは女の人だった。僕と同じ、二十代と思われる細身の女性で、ロングスカートの黒いワンピースを纏まとい、さらに白いエプロンまで身につけていた。服装だけ見れば、侍女かメイドのようだ。

ベクトルは女性の襟首えりくびを唾くえて、体を引きずりながら走っている。

遠目で見た時、人に何か赤いものがついていたので、血を流しているのかと思った。しかし、それは血ではなく彼女の長い紅髪あかかみだったようだ。

ビックリさせないで欲しい……。一瞬、ベクトルが人を噛かみ殺してきたのかと思ったよ。

ベクトルは僕のところまで戻ってくると、唾くえていた人をゴロンツ、と地面に転がした。

「ちよ、ちよっと! 大丈夫ですかっ!?!」

僕は慌あわてて女性の安否を確認した。

声を掛けたり揺すったりしてみたが、反応はない。生きていることだけは間違いないが……気を失っている?

「……zzzz」

いや、違うな。……これは寝ている……のか……。

「ねてるー?」

「……そうみたいだね」

むにゃむにゃ、と口が動き、微かな寝息かすが聞こえてくる。この状況でよくぐつすと眠れるものだ。

これ、本当に寝ているだけか？ でも、外傷とかはないんだよなあ。
「うう……お腹、減った……」
……しかも、お腹を空かせているらしい。呑気だなあ。
とりあえずステータスを確認すると――

ステータス

【名前】 ヴィヴィアン

【種族】 魔族（ヴァンパイア）

【職業】 諜報員

【年齢】 147

【レベル】 54

【スキル】 短刀術

投擲術

闇魔法

生活魔法

解体

跳躍

看破

隠蔽

忍び足

暗視

開錠

畏解除

調葉

魔法攻撃耐性

身体異常耐性

【称号】

紅薔薇姫

実に驚く内容だった。

てか、魔族だよ！ それもヴァンパイアっ！

エーテルディアで魔族というのは、エルフやドワーフといった種族と同じ扱いだ。

人族と敵対しているとか、世界を滅ぼす魔王を崇める種族とか……そういう存在ではない。ただ、どの種族よりも数が少なく、長寿であるだけだ。

ぱっと見は、やっぱり人と変わらないんだな。それに僕と同じ年頃に見えるのに、百四十七歳だっけ。ヴァンパイアの寿命っていくつだっけ？ 千年は軽く生きるんだっけか？

うわっ、スキル構成も凄いわっ！ それに数も多い！

僕の勝手なイメージだが、暗殺稼業とか、そういうのをやっている感じのスキル構成である。実際の職業は諜報員のようなが。

「ベクトル、この人はあっちで倒れていたのか？」

『がるっ』

「そうか」

ベクトルは何故か自慢げに鳴いた。たぶん、人助けをしようとしたからだろう。

「でも、ベクトル。引きずってきたのは駄目だよ。ここが砂浜じゃなかったら、この人は怪我をするところだったんだぞ」

『がるん……』

ベクトルは項垂れて、見るからに落ち込んでいた。

「い、いや、怒っているわけじゃないよ。次からは気をつけような」
『がるっ!』

慌ててフオローすれば、ベクトルはたちどころに元気になる。

確かに怒っているわけではないが……変なものを拾ってこないように躰しんないといけないよな。それにしても、この人をどうするか……。

——ぐうぐう。

……………。

寝ていても、お腹って鳴るんだね。そろそろお昼だし、ご飯の用意でもするかな。

ここじゃ作ったご飯が砂まみれになりそうだから、少し移動するか……。

ご飯は何にしようかな……そうだ、前に作った、あれにしよう。

◆ ◆ ◆

——それは僕が転生して初めて行った街、シーリンに着いてから数日後のことだった。

「すみません」

「おう、いらっしやい」

「こちらで白麦を扱っているって聞いたのですが、ありますか？」

「白麦？ おお、それならあるぞ」

そう、白麦！ 白麦というのはお米のこと。僕は今日、お米を買いに来たんだ。

エーテルディアの白麦は家畜の餌として使われているため、一般的ではない上に、取り扱っている店が少ないので見つけるのに苦労した。

店から店へと訪ね歩いて、やっと辿り着いたのがこのお店だ。
シルからおにぎりや炊けたご飯は貰もらっているが、あまり量はない。それがなくなる前に白麦を買うことができそうで良かった。
パンも嫌いではないけど、やっぱり定期的にお米を食べたくなくなるのは日本人の性さがだと思う。

「何だ兄さん、家畜でも飼うのかい？」

「いいえ。そういうわけではないのですが、購入はできますか？」

「おう。それは問題ない。今、持ってくるからちよつと待っていてくれ」

やはり白麦は家畜の餌以外の用途はないらしい。だから「食べる」なんて言ったら、変な目で見られそうだ。ここは誤魔化ごまかしておいたほうが無難だろう。

しばらくして、店の人は奥から麻袋に入った白麦を持ってきてくれた。見た感じ、五キロってところかな？

「これでいいか？」

袋の中を確認させてもらうと、まさしく米！

そこにはきちんと精米された、白い粒の状態の米が入っていた。粃もみ殻がついたものや玄米の状態を想像していたが、良い方向に予想外だったな。これなら、このまま使うことができる！

「もう少し欲しいんですが、ありますか？」

「構わないぞ。どのくらい欲しいんだ？」

「……どのくらい売ってもらえますか？」

品質改良をしていないものだから、日本産の米より味は落ちると思うが、米がない生活よりはマシだろう。

それに、白いご飯で食べるにはイマイチだったとしても、リゾットやチャーハンなど、味付け次第では問題なく食べられると思うんだ。だから、買えるなら多めに確保しておきたい。

「今、店にあるのは全部で四袋だ。その量なら売っても問題ない。それ以上となると、仕入れなさいかんから時間がかかるな」

四袋……二十キロくらいか。

「買っても問題ないのなら、四袋全てください」

「おお、わかった。今、運んでくるから待っていてくれ」

僕は店にあった白麦を全て購入し、ほくほくとした気分で店を後にした。

「さて、炊飯器がないから鍋だな。上手く炊けるかな……」

早速、僕は白麦を炊いてみようとして、街の外の人気のない場所で準備を始めた。

街道から外れた森の中の、少し開けた場所だ。

——ピロントツ

いざ、米を炊いてみようとしたところで、頭の中で電子音が聞こえた。

「シルだよな。……《オープン》」

メニュー画面を出すと、アイテムリストに新しいアイテムが増えていた。

「おお、これは！」

それは、日本のキッチンには欠かせない電化製品、炊飯器だった。

電気コンセントの代わりに火の魔石が組み込まれた魔道具で、使い方は電化製品と同じく、研いだ米と水を入れて、スイッチオン！ ご飯が炊き上がると、自動的に停止するようだ。

米を炊く道具だから保温はできないみたいだけど、これは嬉しい。

シルに感謝だ！ ありがとう！！

すぐに試してみると、ご飯は十分ほど炊き上がった。

早炊きよりも短時間！ とっても素晴らしい！

「あちっ……んぐ」

炊き上がったばかりのご飯をすぐに頬張る。

あっ、普通に美味しい。これなら白いご飯としても問題なく食べられる。

「アレン、エレナ。あーん」

アレンとエレナがこちらをじい……と見ていたので、スプーンですくったご飯を目の前に差し出すと、二人ともパカッと口を開いた。たとえばちょっとよくないけど、お腹を空かせている雛鳥ひなどりのようだ。



それぞれの口にご飯を入れると、二人はもぐもぐと味わうように食べていた。

「どうだ？」

「……おしー」

「そうか。良かった」

アレンとエレナはほんのりと笑みを浮かべた。

ご飯が二人の口に合って本当に良かったと思う。駄目なら別の食事を用意するけど、やっぱり元日本人の僕としては、アレンとエレナがご飯が苦手だったらちよっと悲しいもんな。

さて、残りのご飯は食べやすいように、おにぎりにでもしておこうかな？

しかし、海苔がないしなあ。それに、塩むすびじゃ味気ないので、何か具を入れたいんだが……。具か……。海鮮系の食材はまだ手に入っていないから、鮭やタラコはないし……。同じ理由で、オカカや昆布、海苔の佃煮なんかもできない。

ツナマヨ……。ツナも魚だな……。というか、ツナってどうやって作るんだ？ マグロの切り身をオイルに浸して、低温で加熱するんだっけか？ マグロが手に入ったら試してみよう。

天むす？ いや、駄目だ……。エビも海の食材だし……。

こうやって考えると、おにぎりの具って、意外と海の食材が多いんだなあ。

海以外だと……。梅干しか。見た目も味も梅に似た果実はあるものの、さすがに梅干しはない。

高菜？ 似たようなものは作れそうだけど、僕が苦手なので却下で！

鶏五目はご飯を炊く時点で仕込まないと。今回は無理だが、材料自体は揃いそうだから今度

作ってみようか。

むう。あとは何があったかなあ。案外、思いつかない……。



あの日は結局、炊いたご飯を《無限収納》にそのまま保存するしかなかった。

まだ水神の眷属長様からアイテムを買っていないから、海産物は全滅だったんだよな。それに買った後だったとしても、おにぎりの具材になりそうなものはなかったんだよ。

だから、今日はベイリーの港の朝市で購入した食材を使って、リベンジするのだ！

用意したものは、鮭っぽい魚の塩焼きをほぐしたもの。

マグロに似た赤身の切り身で作ったツナもどきに、お手製マヨネーズを和えた、なんちゃってツナマヨ。わりと美味しくできたと思う。

あとは刻んだ昆布をショーユなどの調味料で味付けした昆布の佃煮。鰯節を細かく削ったオカカも作ってみた。

海苔も似たような海藻があったから用意したよ。まず海藻をよく洗って細かく刻み、薄く平らに伸ばして、水魔法で水分を取り除いたあとで生活魔法の《ドライ》を使って乾燥。

きめは少し粗かったけど、ちゃんと海苔になっていた。やればできるもんだ！

さて、ご飯も炊けた。具材と海苔は用意した。ああ、あと塩だな。ちよつと奮発して一番良い塩

を買ってきたんだ。

それじゃあ、あとは握るだけだな！

ご飯の中央に具材を入れて、海苔で包む。何の具かわかるよう、外から見るところにほんの少しだけ具をくつつけた。

そうして次々に握ることしばし――

「よし、できた！」

僕は大量のおにぎりを握り、先程ジュールに軽く足蹴にされたサンドクラブの足を使ったスープを作った。

「みんなー、ご飯だよー」

「「うはーん」」

『きやん』

『なあー』

『ペイ』

『がるっ』

僕の呼びかけに、少し離れたところでじゃれ合っていた子供達は一斉に駆け寄ってきた。

ヴィヴィアンさんがいつ目を覚ますかわからないので、ジュールとフィートには小さな姿になってもらっている。

ボルトとベクトルに関しては諦めた。姿を見られてもどうにか誤魔化す方向でいこうと思ってい

る。弱っていたところを契約したとか、子供だった時に契約したとかでね。

「……zzz……ん？ ご飯っ!?」

そう思っていたら、ヴィヴィアンさんが目を覚ました。

「ご飯。ご飯はどこですかあ〜？」

ガバリツ、と体を起こすと、きよろきよろ周りを見渡して『ご飯』を探していた。

何か……美人なのに残念感がたつぷりの女性だ。

そんなヴィヴィアンさんをよそに、子供達はテーブル代わりの木箱の前に並ぶ。

「いただきますーす」

『きやん』

『な〜う』

『ビィ』

『がるっ』

アレンとエレナは、おにぎりやスープを取り分けたお皿の前で行儀良く食事の挨拶をすると、ゆつくりと食べ始めた。

ジュール達も二人を真似して、しつかりと挨拶をしてからおにぎりに齧りつく。

僕はみんなが食べ始めたのを見ると、起き上がって子供達の方を羨ましそうに眺めているヴィヴィアンさんの前にも、おにぎりとスープを差し出した。

「いいんですかっ!? わ〜、いただきますっ!」

子供達が先に食べていたので、ヴィヴィアンさんはおにぎりが食べ物だと判断できたようだが、これは何だろう……? という感じで躊躇いがちに口をつけた。

しかし、二口目、三口目と食べ進めると、四口目からは夢中で頬張りだした。

「はぐはぐ……んぐんぐ……」

それはもう、凄い勢いでおにぎりがお腹に収められていく。バクバクバクツ、という効果音が聞こえてきそうだ。

「アレン、エレナ。それは二人の分だからゆつくり食べような」

あまりのヴィヴィアンさんの食べっぷりに、アレンとエレナは自分の食事まで取られるのではと思っただけ僕言葉で安心したのか、アレンとエレナは口いっぱい頬張りながらコクコクツと頷き

食べるペースを元に戻す。

「ところで、空腹で倒れていたようですが、どうかしたんですか？」

「んぐっ! んぐんぐっ!」

僕が尋ねると、ヴィヴィアンさんは口いっぱいにおにぎりを詰め込んだまま喋ろうとした。

「いや……食べ終わってからです……」

「んぐっ!」

何を言っているかわからないし、行儀が悪い。アレンとエレナが真似するといけないので、話は食事の後のほうがいいよな。

ヴィヴィアンさんは、黙々と食べ続けている。
やっぱり凄い食べっぷりだ……。

「いや、食べた食べた。ごちそうさまでした」

あつという間に大量に握ったおにぎりがなくなってしまった。

「あ、私はヴィヴィアンといます。ヴィヴィでもヴィヴィアンでも好きに呼んでくださいな。ところで、さっきのあれは何ですか。今まで食べたことないものでした」

「僕はタクミ。えつと、さっきのは白麦を水で炊いたものです」

「白麦ですかあ？ あの、家畜の餌にする？」

あ、しまった……。米はエーテルディアでは家畜の餌だったわけ。迂闊うかつだったな。

「すみません。僕の故郷だと白麦は普通に人の食事として食べるものなので、つい出してしまいました。気分を害しましたか？」

「いえいえ。美味しかったので問題ないです。それにしても白麦ですか。こんなに美味しいものだったとは知りませんでした」

ヴィヴィアンさんは白麦と聞いても不快に思った様子はなかった。むしろ気に入ったみたいだ。良かった……。

今度から人に食事を提供する時には気をつけなとな。家畜の餌を出されて侮辱おとしよされた、と勘違いする人もいるだろうし。

「いや、お兄さんは料理上手ですね。あれ？ お兄さん？ パパさんかな？」

気がつくともヴィヴィアンさんは、アレンとエレナに向かって話し掛けていた。

「……？ おにーちゃん」

ヴィヴィアンさんに対して、特に警戒していなかったはずのアレンとエレナが、一瞬、戸惑うような反応を見せた。

……どうしたんだろう？

今、ヴィヴィアンさんの目の前で確認するのはやめたほうがいいだろう。あとで二人に聞くのを忘れないようにしないと。

「お兄さんと合っていましたか。でも、反応が悪かったですねえ。実はやっぱりパパさん？」

ヴィヴィアンさんも、アレンとエレナの戸惑いに気づいたらしい。

というか、何を勘ぐっているんだ、この人は……。

「兄だつてば……」

僕は二人の代わりに、呆れながらそう答えた。

「すみませくん。私、人の秘密が好物なんです！ 隠されていることを探り当てるのが楽しいですよ」

「……」

ヴィヴィアンさん——いや、もう、ヴィヴィアンでいいか……。

ヴィヴィアンは僕が呆れていることに気づき、おどけたように言った。